

夢枕獫



TOKUMA NOVELS

闇狩り師シリーズ

蒼獣鬼

《妄霊篇》



TOKUMA NOVELS

夢枕 獏

蒼獣鬼《妄霊篇》

発行者 荒井 修

発行所 徳間書店

東京都港区新橋四ノ一〇 郵便番号一〇五

電話四三三・六二三一 振替東京四一四四三九二一

Baku Yumemakura ©1985

落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan

〈編集担当 吉川和利〉

85L15bf

ISBN4-19-153134-4

夢枕獫



TOKUMA NOVELS

闇狩り師シリーズ

蒼獣鬼

《妄霊篇》

蒼獣鬼 そうじゅうき 《妄霊篇》 もうりょうへん ・夢枕獏 ゆめまくら ばく

ナスルの頂上を飛翔するツルの群れを見た
という長年の夢が、ついにこの秋、実現す
ことになった。過日、トレーニングをかね
富士山頂を取材したが、遠くは北アルプス
峰から駿河湾、居を構える小田原の街を眼
に見降し、その雄大な景観を楽しみながら
、心はすでに次作の構想にあったようだ。



TOKUMA NOVELS



闇狩り師シリーズ

蒼獣鬼《亡女霊篇》

罗枕獏



間書店

TOKUMA NOVELS

目次

序章

一章

異い形ぎよう

23

二章

荒こう神じん

36

三章

鬼き哭こく

69

四章

鳴なる神かみ

109

五章

魔ま呪じゆ

129

六章

乱らん神しん

159

あとがき

209

なお けものあり
しみじみと蒼黒く
ぎちぎちと骨軋ませて
わが心に疾り来るけものあり

岩村賢治詩集『蒼黒いけもの』より

序章

1

それは、微細な、夢の片のようであつた。

手が届きそうで、届かない。

すぐ近くにあるのに、その煌きに触れようとすると、指先から逃げてしまう。

小さな、金色の片――。

それが、透明な、浅い水の底で揺れている。白や灰色や黒い砂粒の中で、その金色が動いている。

清冽な水の中で、ひらひらと踊っている。

淵の岸边にしゃがんで、その子供は、水の中を眺めていた。

鋭利な刃物に似た冷たい水であつた。

手を入れると、その気が切れてしまうかと思われた。透明な水が、一メートル先から急に深くなり、蒼い色に変わっている。二メートル先は、もう底が見えない。

子供には、同じ透明な水が、こことそこでは、どうしてこうも色が違うのかわからない。

右手の奥に、滝があつた。

苔むした岩肌を滑り落ちてきた白い飛沫が、そこで、

蒼い深みへと潜り込んでいる。

その音が、絶え間なく子供の耳を打っている。

その滝の周囲で、崖は急にすぼまっている。岩と植物とで造られた円筒の小世界であった。

細かい水の飛沫が、大気の中に満ちている。

崖の間から生えている羊歯も、岩も、何もかもが濡れていた。岩の上をおおった分厚い苔も、濡れた暗い光沢を放っている。

黒い岩も、草の緑も濡れている。濡れていないものはない。

そこは、外界から隔離された別世界であった。

頭上には、新緑がかぶさっていた。

楓や、樺や、桂の新緑に縁どられて、青い空が見えている。その真上の新緑だけが、陽光を受けて明るく輝いている。

初夏――。

谷の空気の中に、植物や湿った黒い土の匂いが、ひんやりと溶けている。

しかし、それ等の樹々や植物の匂いには、まだ蒸れたものが無い。

上空の透き間からこぼれ落ちてきた陽光が、淵の岸辺に、光の斑を落としていた。

水の中に差し込んだその光が、水底の砂をきれいに浮きあがらせている。

その水の中で、金色の片が揺れているのである。

大きさにして、やっと一ミリあるかどうか。

子供は、また、水の中に右手を伸ばした。

人差し指と親指で、それをつまもうとするのだが、

指先をすり抜けていく水と一緒に、それが逃げてゆく。

指先を、それがすり抜けてゆくたびに、もどかしさよりも、傷みに似たものが、子供の心に疾る。

白い皮膚をした、女の顔が浮かぶ。

その女性が、どのような貌だちをしていたのか、今はすでに定かではない。今、指先で触れようとしている金色の細片のように、遠い夢の記憶があるだけである。

甘い傷みが、子供の胸を満たした。

しかし、その貌だちは忘れようとも、その女性の存在そのものは忘れようがない。会えば、会ったその瞬間に、すぐにその女性だとわかる。その女性が、自分の母親であつたひとだからである。

だが、今は、その母と呼べる女性に会うすべはない。死んだ人間に、どれだけ指先を伸ばそうと、指は決してそのひとに触れることはない。

それは、小さな、金色の夢の細片であつた。

その光る小さなものに、どうしても触れることができないのか。

子供にはわからない。

触れようと身をのり出せば、冷たい水の中に落ちてしまふのはわかつている。

触れようとして、どうしても触れることのできない夢のようなもの――。

絶え間のない滝の音が、静寂を一層深いものにしていた。

子供は、伸ばしていた手をひっこめ、しゃがんだまま、また水面を見つめた。

細っそりしたひ弱そうな子供だった。

六歳か七歳くらい。小学校にあがったばかりのようである。

枯れ枝のように手足が痩せていた。半ズボンをはいて、Tシャツを着ているのだが、布地が余ってだぶついている。

めったに陽にも当たらないらしく、肌の色が青白い。

薄い皮膚の下に、青い血管が透けて見えている。

瞳だけが、黒く、大きい。

淋しげな色をたたえたその瞳が、水を見ている。

暗い、透明な水であつた。

表面に波が揺れている。

滝壺で造られた大きな輪が、水の流れによって散らされ、その上に落ちた大小の水の飛沫が、さらに無数の波を造っている。その波を浮かせた水の表面が、川底の石の状態で様々な変化を見せている。

黒い対岸の岩の色や、新緑の色、空の青、様々な色がその表面に溶けていた。見えていた色が、次々と別の相をその表面に浮かべてゆく。波のひとつづつを見ていると、^{るがえ}翻りながら絶えずその色を変えてゆくのに、全体として見れば、一時間前とどれほど変化はしていないように見える。

周囲の風景だけでなく、水の表面には、不思議な時間さえもが溶け込んでいるようであった。

きらり

と、水中に、金色の光が揺れる。

真上からの、梢越しの陽が、その上にこぼれていた。浅い水底の石の上に、水面の波紋の影が動いている。

その石の間の砂の中で、金色の光がゆらいでいる。

子供は、また、手を伸ばした。

その白い指先が水面に触れるかどうかの時、ふっ、

と子供は顔を上げた。

頬のそばを、何か風のようなものが通り過ぎたのだ。

瀬音とは別の、小さな水音がした。

子供は、その音の方に視線を移した。自分が指先を伸ばしかけた水面よりも、やや、先の水面——そこに、奇妙なことが起こっていた。

その水面に、波が立っていた。

上流から流れてきた水が、水面に何かがあるように盛りあがり、そこで左右に割れて流れていた。

と、それが動いた。

子供は、黒い瞳をいっぱい開いて、それを見ていた。

それは、見えない素足が、浅く水面を踏んでゆくように、波紋だけを残しながら、そこから上流に向かって動いたのである。

姿の見えない獣が、子供を見つめながら、水面を上流に向かって歩いたかのようにであった。

立ち上がろうとした子供の身体が、大きく前に泳いでいた。

力を入れた足元の石が動いたのだ。

バランスをたてなおそうと前に出した子供の右足が、

水の中に入っていた。バスケットシューズをはいたその足が、水底の石を踏んだ。その足が滑る。

次の足は、追いつかなかった。

水の中に子供の身体が倒れ込んでいた。冷たい水が、どっと子供の身を包んだ。

子供の身体が、重い水に押され、ぐうっと下流に向かって押し出されていた。

2

公園ではない。

街の一角に、奇跡のように残された空地であった。

小さな幼稚園なら、そっくりその空地に造ることができるだけの広さがある。

フェンスで囲まれ、出入口は閉まっているが、フェンスには何カ所か破れた場所があり、そこから人間は自由に出入りができる。その空地を利用しているのは、もっぱら近所の小学生や中学生である。

ヒメジョオンや、エノコログサなどの雑草があちこちに群生しており、芝生らしきものの跡まで残っている。

あるデパートの、木造の寮が建てられていたのだが、二年近く前に火事を出して、それがそのままになっているのである。

半焼した家屋の焼け焦げた木材が運び出され、それっきり、何も手がつけられていないようだった。

建物の一部が、そっくりそのまま残っている。残っているのは、食堂として利用していた部分で、後から元の建物に建て増す形で建てられていたものだ。

大きな楠と数本の桜が植えられていた。

雑草の匂いが、薄く空気の中に立ち昇っている。

——時刻。

すでに陽が沈みきり、あたりに薄闇が満ち始める時間であった。

空には、まだ光が残っているが、地上にはもうその光が届いていない。天へ抜けてゆく陽光の照り返しで、

まだ地上にも明るさが残っている程度である。

建物と、桜の樹との間の草の上に、ひとりの少年が立っていた。

ひ弱そうな体軀をした、細身の少年であった。

その少年を囲んで、三人の少年が立っている。大柄な少年たちであった。囲まれている少年よりも、頭ひとつ、背が高い。

囲まれている少年は、怯えた瞳で三人を見つめながら、桜の幹に背をあずけていた。やっと、中学校に入學したばかりのような歳頃の少年であった。

他の三人は、少年よりも、ふたつかみつつは歳上に見える。中学の三年か、高校一年であってもおかしくはない。

三人のうちの、特に大柄な少年が、犬を連れていた。大きな犬であった。

六〇キロ以上はありそうだった。その場にいる四人の少年の誰よりも体重がある。

黒い犬であった。

体型や、鼻面^{はなづら}のあたりは、土佐犬に似ていた。しかし、土佐犬ではない。土佐犬の血を濃くひいた雑種らしかった。

口吻をめぐりあげ、黄色い牙をのぞかせて、喉の奥で低い唸り声をあげ続けている。小さな雷が、喉にからむような、底にこもった声であった。

この犬が本気になって動けば、鎖を握っている少年がいくら大柄であっても、とてもおさえきれものではない。

両足を踏んばって、その鎖を握っているのだが、その鎖にかなりの力が加わっているのが見ていてもわかる。

半袖のＴシャツから伸びた、大柄な少年の両腕が、堅く浮いた筋肉で強張^{こわば}っている。

「逃がすなよ、隆志——」

と、犬を連れた少年が言った。

「わかってるよ、島田さん——」

犬を連れた少年の右側に立っていた、隆志と呼ばれ

た少年が、草の上を、右に移動した。

「和男——」

と、犬を連れた少年——島田が低くつぶやくと、和男と呼ばれた、島田の左側にいた少年が、左に動いた。これで、三人に囲まれた少年に、逃げ場は無くなった。

ひょろりとした、痩せた体軀の少年であった。

肌の色が白い。

人の肌の白さではない。春先に、暗い谷の奥にいつまでも残っている、残雪の白さだ。痛々しいほどに白い。

ジーンズをはいて、黒いTシャツを着ているが、その黒が、特に喉のあたりの肌の白さを際立たせていた。瞳の黒い美しい少年であった。

病的な、青白い、熱を持たない炎が、そこに人形^{ひとがた}をとったようであった。その肌のどこに他人の指が触れても、そこから全身にまで汚れが広がってしまいうるである。

ここまで生きてこれたのが、不思議なくらいだった。この少年が、人間ではなく、仮に野生の草食獣か何かであったら、幼児期に、とくに他の獣に捕食されてしまっているだろう。

少年の黒い瞳の中に、怯えの色が浮いていた。

可憐な——と、そう表現してもよい風情が、その怯えた瞳と姿態とにある。

幼児を苛めて悦ぶ、苛虐趣味のある男なら、たちまち股間のものを立ち上がらせてしまいうるような光景であった。

しかし、多かれ少なかれ、そのような嗜好を持った黒い獣は、どのような人間の肉の中にも潜んでいるものだ。

たとえ、それが、少年であってもである。

少年の怯えが、少年を囲んだ三人の男たちの肉の中に、暗い悦びを生み出しつつあった。

島田の顔に、小さなひきつれに似た笑みが浮いていた。

眼に、きらきらと、光るものがある。

「加代子とよォ——」

島田が言った。

年齢不相応の、強もてのする言い回しを、すでに身につけている。

「おめえは、いい仲間だったって？」

少年は答えなかった。

背を、桜の幹にさらに強く押しあて、瞳に濃い怯えの色を浮かべた。

「あの女はよ、おれんだぜ。それを知ってたのかい」

少年は首を振った。

「知らなかったってのかい」

島田がつぶやいた。

優しい声音で言っているが、その声が小さく震えている。

犬をおさえている手に力がこもっているためか、わざと声を押して殺しているためか、それはわからなかった。その両方であるのかもしれない。

「でもよゥ」

にっと笑う。

「知っていてもいなくても、同じことだからな」

軽く前に出る。

「もう、やっただろう？」

島田が言うと、少年は首を振った。

「嘘をつくなよ。あの女は好きものなんだ。おめえみてえない男といて、やってないわけはねえ——」

島田は、横の男に声をかけた。

「おれの女に手を出したらどうなるか、そいつに教えてやれよ」

声もたてずに、島田の右横にいた隆志が動いた。

闇が濃くなりかけた草の上を動き、少年に近づいた隆志は、いきなり少年の顔面に右のパンチを叩き込んだ。

拳が、少年の左の頬に当たった。

ごつんと、少年の後頭部が、幹にぶつかった。

気持ちのいいパンチであった。

次は左のパンチであった。

左のパンチが、続いて少年の鼻頭を捕えていた。

すうっと、少年の右の鼻の穴の中から、細い、赤い筋が這い出てきた。

白い肌の上を這い、それは唇に伝った。

少年が右手の甲で、その血をぬぐう。

拳に、赤い色が付いていた。

少年の頬が、かっと熱くなった。

顔の中心に、炎をあてられたような気がした。

さらに殴られた。

ごっ、

ごっ、

という、骨が骨に当る音。

痛みよりも、そういう衝撃の方が最初は鮮明であった。衝撃があつてから、そこに温度が生まれ、その温度によって後から痛みが育ってくるのだ。

次は、腹であった。

腹を蹴られた。

靴の爪先が、下腹にめり込み、顔が前に倒れる、その顔めがけて膝が跳ねあがってくる。

腹の方は、苦しかった。

一瞬は呼吸もできないほどである。

眼から、涙がこぼれていた。

いつの間にか、隆志に和男が加わっていた。ふたりに殴られた。

——何故、自分がこんな眼にあわねばならないのか。口の中が、ぬるぬるしている。

血であった。

唾と共に吐き出すと、草の上にべっとりと赤いものが付く。

「やめて——」

と、言いかけた少年の口を、拳が叩く。

叩く度に、少年たちの内部に、残忍な獣が育ってゆくようであった。少年が怯えれば怯えるほど、その獣が大きくなってゆくのだ。

「おい」